第一章　紫上の物語　若紫の君登場、三月晦日から初夏四月までの物語

［第一段　三月晦日、加持祈祷のため、北山に出向く］

瘧病（わらはやみ、マラリアの流行り熱）にわづらひたまひて（に罹られた源氏は）、よろづに（あれこれと）まじなひ（神頼みや）加持など（仏頼みの祈祷を）参らせたまへど（神官や僧侶たちに上げて貰い為されたが）、しるしなくて（改善も見られず）、あまたたび（何度も周期的に）おこりたまひければ（発熱発作を起こし為されたので）、ある人、「北山になむ（北山になりますが）、なにがし寺といふ所に（これこれと言う寺に）、かしこき（優れた）行ひ人（おこなひびと、祈祷をする行者が）はべる（居ります）。去年（こぞ）の夏も世に発りて（おこりて、この病が流行して）、人びと呪ひ煩ひし（まじなひわづらひし、祈祷が効かずに困っていた）を（ところを）、やがて（其の行者が試みて）止むる類ひ（とどむるたぐひ、発りを鎮めた例が）、数多侍りき（あまたはべりき、沢山御座いました）。獣強らかし（ししこらかし、狩の獲物に手強ずるー病を抉らせて）つる（しまった）時は転て侍るを（うたてはべるを、難儀しますので）、とくこそ（疾くこそ、早めに）試みさせたまはめ（遣らせてご覧に為されませ）」など聞こゆれば（などとお勧めしたので）、召しに（御呼び立ての）遣はしたるに（使者を行者に遣わせ為されたが、行者は）、「老い屈まりて（おいかがまりて、歳を取り弱ってしまったので）、室の外（むろのと、岩屋の外）にもまかでず（には出られません）」と申したれば、「いかがはせむ（致し方ない）。いと忍びて（ごく内々に）ものせむ（出向こう）」とのたまひて、御供（おんとも）にむつましき四、五人（よたりいつたり）ばかりして、まだ暁におはす（まだ夜明け前に御出掛けに成られる）。

やや深う入る所なりけり（行者の居ると言う寺は山を少し深く入った所だった）。三月の（やよい弥生、陰暦三月の）つごもり（月籠りの末日、晦日三十日）なれば、京の花盛りはみな過ぎにけり（町の桜はみな散っていた。が、）。山の桜はまだ盛りにて、入りもて（登り進んで）おはするままに（行かれると）、霞のたたずまひも（霞み掛かる景色も）をかしう見ゆれば（風情があって）、かかるありさまも（こうした散策さえ）ならひたまはず（お慣れではない）、所狭き（ところせき、堅苦しい）御身にて（御身分なので）、めづらしう思されけり（物珍しくお思いになった）。

寺のさまも（寺の様子も）いとあはれなり（ごく質素だった）。峰高く（切り立った）、深き（道険しい）巌屋の中にぞ、聖（ひじり、其の行者は）入りゐたりける（入って座していた）。登りたまひて（源氏は岩屋の前にお登りに成って）、誰とも知らせたまはず、いと（病と忍びの軽装でとても）いたう（ひどく）やつれたまへれど（お疲れの身形でいらしたが）、しるき（隠し難い）御さまなれば（気品を御備えなので、行者は源氏を一目見て）、

「あな（これはまた）、かしこや（畏れ多くも）。一日（ひとひ、先日）、召しはべりし（御召しのあった）にや（御方なので）おはしますらむ（御座いましょうか）。今は、この世のことを思ひたまへねば（現世を思わず静かに座して死を待つのみにて）、験方の行ひ（げんがたのおこなひ、修験の作法）も捨て忘れて侍るを（はべるを、居りますものを）、いかで（何故）、かう（此処まで態々）おはしましつらむ（お見えに成られましたか）」

と、おどろき騒ぎ(俄かに居を正して)、うち笑みつつ(和やかに笑いながら)見たてまつる(拝礼した)。いと尊き(まことに偉い)大徳なりけり(高僧なのであった。修法を忘れたと挨拶したものの大徳は)。さるべきもの作りて(人型の祓い紙を用いて)、すかせ(病の気を源氏の身体から祓い紙に透かし取って)たてまつり(祈祷台に奉り)、加持など参るほど(念行を勤める内に)、日高くさし上がりぬ(日が上ってすっかり明るくなっていた)。

[第二段　山の景色や地方の話に気を紛らす]

(やがて一頻りして源氏は、)すこし立ち出でつつ(其の岩屋から少し離れ出て)見渡したまへば(辺りを見渡されると)、高き所にて(山の上なので)、ここかしこ、僧坊(そうばう、僧宿所)どもあらはに見おろさるる(良く見下ろせる、其の中に)、ただ(ちょうど)この葛折り(つづらをり、いくつも折れた坂道)の下に、同じ(他と同じ)小柴なれど(小柴の垣根だが)、うるはしく(きれいに)し渡して(揃え廻して)、清げなる(整然と)屋(や、舎屋)、廊(らう、廊下)など続けて(座敷と廊下を繋ぎ設けて)、木立いとよしあるは(庭に木立を配してあるのを見て源氏は)、

「何人(なにびと)の住むにか(住む家なのだろうか)」

と問ひたまへば、御供なる人、

「これなむ(あれは)、なにがし(これこれと由緒ある)*僧都(そうづ、当寺住持職)の、二年(ふたとせ)籠もりはべる方にはべるなる(御籠りに成った所だそうです)」　*「僧都」は僧正に次ぐ僧官職名で殿上を許される貴人、との事。此処では其の地位にある当山の首座。

「心恥づかしき(恐縮すべき)人住むなる(人が住むに相応しい)所にこそ(立派な家では)あなれ(あったものだなあ)。あやしうも(浅はかにも)、あまり(少し)やつしけるかな(軽装過ぎてしまったかな)。聞きもこそすれ(詳しく聞いて置けば、良かったかな)」などのたまふ。

清げなる(こざっぱりとした)童など(女童など)あまた出で来て、閼伽(あか、仏前供養水)たてまつり、花折りなどするもあらはに見ゆ。

「かしこに(あそこには)、女こそありけれ(どうも女が居るぞ)」
「僧都は、よも(よもや)、さやうには(然様な女囲いは)、据ゑたまはじを(し為さるまいに)」
「いかなる人ならむ(どういう人なのだろうか)」

と口々言ふ。下りて覗くもあり(少し坂を下りて覗いて来る者も居て)。

「をかしげなる(美しい)女子ども(をんなごども)、若き人(若い女房)、童女(わらはべ、少女)なむ(といったところが)見ゆる(居ります)」と言ふ。

君は(一息ついて源氏は)、行ひしたまひつつ(岩屋で勤行を続ける内に)、日長くる侭に(ひたくるままに、日が盛んになって昼に差し掛かると発熱する頃なので)、いかならむと思したるを(どうなるのだろうかと心配なされたが、其の様子を見た供の一人が)、

「とかう（とかく何かと）紛らはさせたまひて（気を紛らわせて）、思し入れぬなむ（気に為さらないのが）、よくはべる（良う御座います）」

と聞こゆれば（と申し上げたので源氏は）、後へ（しりへ、後ろ側）の山に立ち出でて、京の方を見たまふ。はるかに霞みわたりて（遠く霞んで）、四方の梢（身を囲む木立の枝は）そこはかとなう（ゆらゆらと）煙りわたれるほど（煙立つ様で）、

「絵にいとよくも似たるかな。かかる所に住む人、心に思ひ残すことは（世情のわだかまりは）あらじかし（ないのだろう）」とのたまへば（と源氏が仰ると）、

「これは（こんな景色など）、いと浅くはべり（まるで序の口です）。人の国（ひとのくに、地方）などに侍る海、山のありさまなどを御覧ぜさせて（御覧に入れさせ）はべらば（ましたならば）、いかに（どれほどか）、御絵（絵の味わいが）いみじう（しみじみと）増さらせたまはむ（深められることでしょう）。富士の山、なにがしの嶽（たけ、山々）」

など、語りきこゆるもあり（などと話す供の者も居る）。また西国（にしのくに、九州）のおもしろき浦々（入り込んだ入り江や）、磯（海浜）の上（うへ、事柄）を言ひ続くるもありて（言い繋ぐ者なども居て）、よろづに紛らはしきこゆ（其々口々に何かと源氏の気を紛らわそうと申し上げる。また一人が、）。

「近き所には、播磨の明石の浦こそ、なほ（やはり）殊に侍れ（ことにはべれ、格別です）。何の至り深き（特に此処という）隈（くま、角）はなけれど、ただ、海の面（おもて）を見わたしたるほどなむ（を眺めているだけで）、あやしく（不思議と）異所に似ず（こととところにに ず、他所と違って）、ゆほびかなる所にはべる（優美な所です）。

かの国の前の守（さきのかみ、以前の播磨守で）、新発意（しぼち、出家したばかりの人）の、女（むすめ、娘を）かしづきたる家（大事に育てている家は）、いと（大変）至しかし（いたしかし、立派なものです）。大臣の後（だいじんののち、以前には大臣を拝命した家柄）にて、出で立ちもすべかりける人の（出世も出来たはずの人ですが）、世の僻者（ひがもの、変わり者）にて、交じらひもせず（人付き合いをせず）、近衛の中将（という中央政務官）を捨てて、申し（わざわざ願い出て）賜はれりける（拝命した）司なれど（国司の職でしたが）、かの国の人にも（任国での配下にも）すこし（適当に）侮られて（あなづられて、あしらわれて目立った成果を上げられず）、『何の面目にてか（なにのめいぼくにてか、どのような顔をして）、また都にも帰らむ（再び京にも帰るのか、いや帰れはしない）』と言ひて、頭も下ろし（かしらもおろし、剃髪して）侍りに経るを（はべりにけるを、いながらも）、すこし奥まりたる山住みもせで、さる（あのように）海づらに出でゐたる、僻僻しき（ひがひがしき、変哲）やうなれど（ぶりだが）、げに（実際に）、かの国のうちに（播磨の中に）、さも（然も在るべき）、人の籠もりゐぬべき（人が籠もり住まうべき）所々はありながら、深き里は、人離れ（ひとばなれ、人少なく）心すごく（物寂しく）、若き妻子の思ひ侘びぬ（おもひわびぬ、詰らない思いをする）べきにより（だろうからということで）、かつは（殊更に）心をやれる（思う様に贅を尽くした）住まひになむはべる（住まいなので御座います）。

先つ頃(さきつころ、この前)、まかり下りて(明石に出向く)はべりしついでに(折が在った其の序でに)、ありさま(其の家の様子を)見たまへに(伺いに)寄りてはべりしかば(お寄りしてみましたが)、京にてこそ所得ぬ(所在無い)やうなりけれ(様子だったが)、そこらはるかに(明石では広々と)、いかめしう占めて(広大な土地を得て)造れるさま(造営した邸の様子は)、さは言へど(何と言っても)、国の司にて(国司だからこそ)し置きけることなれば(為し得た事なので)、残りの齢(のこりのよはひ、余生を)ゆたかに経べき(ふべき、過ごせる)心構へも、二なく(他になく十分に)したりけり(してあるものです)。後の世の勤めも(加えて出家して後世の為の念仏行も)、いとよくして(怠り無ければ)、なかなか法師勝り(ほふしまさり、出家して人柄が増す)したる人になむはべりける(人なので御座います)」と申せば(と申し上げると源氏は)、

「さて(それで)、その女は(むすめは、如何いう人ですか)」と、問ひたまふ。

「異しうは非ず(けしうはあらず、まずまずの)、容貌、心ばせ(気立て)などはべるなり(などと存じます)。代々の(だいだいの、後任された多くの)国の司など(役人たちが)、用意(贈り物を)ことにして(格別に示して)、さる心ばへ(通いの申し込みを)見すなれど(したようですが)、さらに(その出家者は一向に)うけひかず(受け入れません)。『我が身のかく徒に(いたづらに、だらしなく)沈める(不遇の目にあって)だに(さえ)あるを(いるものを)、この人ひとりにこそあれ(せめてこの娘一人だけは良縁をと)、思ふさま(思う所は)ことなり(特別に在る)。もし我に後れて(おくれて、取り残されてー早々に我が死んで)その志とげず(良縁を添い遂げず)、この思ひおきつる(この願いを掛けた)宿世違はば(宿命を果たせない時は)、海に入りね(入水して没せよ)』と、常に遺言しおきて侍る成る(はべるなる、いるようで、御座います)」

と聞こゆれば(と其の供人が申せば)、君もをかしと聞きたまふ(君も面白くお聞きに為る)。人びと(他の供人たちは口々に)、

「海龍王の后(かいりゅうわうのきさき、竜宮の姫様)になるべき傅き(いつき、大事な)女な(むすめな、娘だという)なり(ことなんだな)」
「心高さ苦しや(勿体無い事で)」とて笑ふ。

かく言ふは(この明石の女の話を切り出した供人は)、播磨守の子の(はりまのかみのこの、今の播磨守なる上達部カンダチメ三位以上の上流貴族の子息という身分なので)、蔵人より(若年時の習わしである六位位階での宮中雑役勤務から)、今年、冠得たる(かうぶりえたる、五位に叙せられ一人前の殿と認められて雑役を除した者)なりけり(であった)。

「いと(相当な)好きたる者なれば(好色者なので)、かの入道(にふだう、剃髪し仏門に入る出家者だが此処では特に在俗して寺住まいをしない者の意)の遺言(言い付けなど)破りつべき心は(破ってしまえる自信が)あらむかし(あるのでしょうな)」
「さて(それで)、たたずみ(様子を見に)寄るならむ(立ち寄るというわけだ)」

と言ひあへり(などと言い合った)。

「いで(いや)、さ言ふとも(そうは言っても其の娘は)、田舎びたらむ(田舎びているだろう)。幼くよりさる所に生ひ出でて、古めいたる(時代遅れになった)親にのみ(親だけの)従ひたらむは(云う事を聞いていたのでは)」

「母こそ(ただ母親の方は)ゆゑあるべけれ(躾の心得があるのだろう)。よき(優れた)若人(若女房や)、童など(女童など)、都のやむごとなき所々より(都の高貴な家々から)、類にふれて(るいにふれて、縁故を伝に)尋ねとりて(探し集めて)、まばゆくこそ(磨き上げて)もてなすなれ(育てているようだ)」

「情けなき人(大した事も無い者が)なりて(国司になって)行かば(求婚に行ったとして)、さて心安くてしも(そう気安く手紙を書いてみても)、え置きたらじをや(とても適わない訳か)」

など言ふもあり。君、

「何心ありて(如何いう心算で父君は)、海の底まで深う思ひ入るらむ。底の「*みるめ」も、もの難しう(むつかしう、頂けない)」　*「みるめ」は「見る目ー見通し」と海草の「海松布ミルメ」を掛けて、言葉遊びをしている。海の底の「竜宮を思う」ということは「後宮を思う」、即ち娘の入内を願うという事で、〈其処の見通し〉も中々難しい、と源氏が言った訳だ。是を帝の御子たる源氏が、自分の地位の高さから入道を見下して言ったのでは、厭味も良い所だ。そこで先に話題になった海竜王を引き合いに出して、海草の駄洒落で茶化しながら、父君の高望みを窘めた、という所だ。いや普通なら是でも十分に厭味なのだが、「海松布」が女陰の隠語なので、色事は思うようには行かない、と言う意味が重なって下世話話めくので、高飛車に見えない。

などのたまひて、ただならず(少なからず興味を)思したり(持たれた)。かやうにても(このような雑談においても)、なべてならず(聞き流さず)、もて(少し)ひがみたること(型通りではない事を)好みたまふ御心なれば(好まれる御性格なので)、御耳とどまらむをや(お耳を止められたのだろう)、と見たてまつる(と供人たちは思っていた)。

「暮れかかりぬれど(暮れかかっておりますが)、発らせ給はず(おこらせたまはず、発熱を起こされずに)なりぬるにこそは(済んで居られては)あめれ(在るようです)。はや帰らせたまひなむ(早くお帰りに成るのが宜しいかと、存じます)」

とあるを(と言う者が居たが)、大徳(だいとこ、は)、

「御もののけなど、加はれる(に取り憑かれて御出での)さまにおはしましけるを(御様子ですので)、今宵は、なほ静かに加持など参りて(まゐりて、為されて)、出でさせたまへ(明日にでもお帰り為されませ)」と申す。

「さもあること(其れは成る程)」と、皆人申す。君も、かかる旅寝も慣らひたまはねば(こうした外泊は珍しく)、さすがにをかしくて(どこか楽しげに)、

「さらば暁に(それでは明日早朝に、帰る事にしよう)」とのたまふ。

［第三段　源氏、若紫の君を発見す］

人なくて（宿所と案内された山堂には人が居なかったので）、つれづれなれば（何の用も当ても無く）、夕暮のいたう霞みたるに紛れて、かの小柴垣の辺（ほど）に立ち出でたまふ。人びとは（他の供人は）帰したまひて（御帰しに為って、一人残した）、惟光朝臣と覗きたまへば、ただ（ちょうど）この（この柴垣から正面に見える）西面（にしおもて、西向き）にしも（に開いている座敷の中に）、仏据ゑたてまつりて（持仏を置いて）行ふ（念行する）、尼なりけり（尼僧が居た）。簾（すだれ）すこし上げて、花たてまつるめり（花を供えているようだ）。中の柱に寄りゐて、脇息（けふそく、肘掛）の上に経（きゃう、経巻）を置きて、いと（とても）なやましげに（病気で辛そうに）読みゐたる（読んでいる）尼君、ただ人と見えず（普通の人には見えない）。四十余（よそじあまり、四十過ぎ）ばかりにて（ぐらいで）、いと白う貴に（あてに、上品で）、痩せたれど、頬つき脹らかに（つらつきふくらかに、頬がふっくらとして）、まみのほど（目の辺りで）、髪のうつくしげに（髪がきれいに）そがれたる末も（切り揃えてある端も）、なかなか（かえって）長きよりもこよなう（長いより格別で）今めかしき（新しく感じる）ものかなと、あはれに見たまふ（趣き深く御覧になる）。

清げなる大人（清廉然とした女房の）二人ばかり、さては（それと後は）童女（わらはべ、女の子たち）ぞ（だけが）出で入り遊ぶ（出入りして遊んでいる）。中に十ばかりやあらむと見えて（其の中に十歳くらいに見えて）、白き衣（きぬ、内着に）、山吹などの（山吹色の）萎えたる（柔かい上着を）着て、走り来たる女子（をんなご）、あまた見えつる子どもに似るべうも（にるべうも、比べ物に）あらず（為らないほど）、いみじく（素晴らしく）生ひさき（成長する様子が）見えて（窺えて）、うつくしげなる（美しくなりそうな）容貌なり（顔立ちだった）。髪は扇を広げたるやうにゆらゆらとして、顔はいと（泣いた後の様にとても）赤くすりなして（赤く手でこすって）立てり（立っていた）。

「何ごとぞや。童女と腹立ち（喧嘩）たまへるか（し為されたか）」

とて、尼君の見上げたるに、すこし覚えたる所（おぼえたるところ、似通った面影）あれば、「子なめり（親子なのだろう）」と見たまふ（と源氏は思われた）。

「雀の子を犬君（いぬき、という名の童女）が逃がしつる。伏籠（ふせご）のうちに籠めたりつるものを（囲って在ったのに）」

とて（と言って其の女子は）、いと口惜しと思へり（とても口惜しがった）。この（側に）ゐたる大人（居た女房が）、

「例の（れいの、いつもの）、心なしの（考え無しが）、かかるわざをして（そんな真似をして）、さいなまるるこそ（叱られるんだなんて）、いと心づきなけれ（本当に困りものです）。いづ方へか（雀はどっちの方へ）まかりぬる（行ってしまったものやら）。いとをかしう（とても可愛く）、やうやう（漸く）なりつるものを（慣れてきたものを）。烏などもこそ（カラスなんぞが）見つくれ（見つけたら、大変でしょうに）」

とて、立ちて行く(と言って立ち去る)。髪ゆるるかにいと長く、めやすき人なめり(見た感じの良い女房だった)。少納言の乳母(しょうなごんのめのと)とこそ(というように)人言ふめるは(呼ばれていた其の女房は)、この子の後見(うしろみ、世話係り)なるべし(なのだろう)。

尼君、
「いで(まぁ)、あな(なんて)幼や(をさなや、幼稚な)。言ふかひなう(言う甲斐も無い)ものしたまふかな(事で御座いますね)。おのが(わたしが)、かく(こうして)、今日明日に覚ゆる(おぼゆる、寿命と思える)命をば、何とも思したらで(たらで、給われぬでー為されないで)、雀慕ひ(雀を追って)たまふほどよ(居為されるなんて)。罪得る(つみうる、生き物を捕えるのは罪に為る)ことぞと、常に聞こゆるを(いつもお話し申すものを)、心憂く(情けない、事です)」とて、「こちや(此処に)」と言へば、ついゐたり(其の子は尼君に前に座った)。

頬付き(つらつき、顔つき)いと労たげにて(らうたげにて、可愛らしくて)、眉のわたり(眉毛が)うちけぶり(うっすらとして)、いはけなく(子供らしく)かいやりたる(髪を手で掻き流した)額つき(額の形に)、髪ざし(其の生え際)、いみじう(本当に)うつくし(目映い)。「年長行かむ様(ねびゆかむさま、成長する姿が)ゆかしき人かな(見てみたい子だな)」と、目とまりたまふ。さるは(それと言うには、此処の子が)、「限りなう心を尽くしきこゆる人に(心底から御慕い申し上げる人に)、いとよう似たてまつれるが(とても良く似て御出でなので)、まもらるるなりけり(見つめてしまっていたものだ)」と(と源氏自身が気付かれて)、思ふにも(其の恋慕を思うにつけても)涙ぞ落つる(涙さえ落ちる)。

尼君(尼君は前に座った女の子の)、髪をかき撫でつつ、
「梳る(けづる、髪を梳く)ことを煩がり給へど(うるさがりたまへど、嫌がり為さるが)、をかしの(きれいな)御髪や(みぐしや、髪ですよ)。いとはかなう(とても頼りなく)ものしたまふこそ(して居なさる事が)、あはれにうしろめたけれ(気に為って成りません)。かばかりになれば(貴女ぐらいの歳になれば)、いとかからぬ人もあるものを(ずっと違う人も居るのに)。*故姫君(こひめぎみ、亡くなった貴女の母君)は、十(とを)ばかりにて*殿に後れ(おくれ、先立たれ)たまひしほど、いみじう(随分と)ものは(何事も)思ひ知り(聞き分けて)たまへりしぞかし(御出ででしたものを)。ただ今(此処で)、おのれ(わたしが)見捨てたてまつらば(貴女を御見捨て申す事にでも成れば)、いかで世におはせむとすらむ(どのようにして生きて行こうと為されまするのか)」
尼君が言う「故姫君」は、尼君が高貴な家柄なので我が子を姫君と言っていて、其の姫君が亡くなっているのだから、「死んだ我が子」の事なのだが、其の我が子が産んだ孫が此の女の子である。其の孫に対して、其の母親を「故姫君」と慈しんで呼ぶところに、尼君が孫を親しく世話している様子が偲ばれる。御祖母ちゃん子なわけだ。「殿」は尼君の夫で「故姫君」の父親。

とて、いみじく泣くを(と言って頻りに泣くのを)見たまふも(御覧になった源氏までも)、すずろに悲し(物悲しい)。幼心地(をさなごこち、女の子は子供心)にも、さすがに打ち守りて(うちまもりて、尼君をじっと見つめて)、伏目になりて俯したる(うつぶしたる、うつ向いた)に(時に)、こぼれかかりたる髪、つやつやと目出立う見ゆ(めでたうみゆ、美しく見えた)。

「生ひ立たむありかも知らぬ若草を、おくらす露ぞ消えむそらなき」(和歌 5-1)

「まぁまぁ此の子は元気だね、けれど其処等が心配だ」（意訳 5-1）

*「生ひ立たむ」は〈成長する〉であり〈行く末〉である。「ありかも知らぬ」は〈何処とも言わず〉であり〈覚束無い〉である。「若草を」は〈新芽を〉であり〈女の子を〉である。「おくらす」は〈贈らす－飾る〉であり〈後らす－先立つ〉である。「露ぞ」は〈朝露さえ〉であり〈尼御こそ〉である。「消えむ」は〈払い去ってしまう〉であり〈逝ってしまう〉である。「そらなき」は〈相等成り来－様相である〉であり〈空無き－気持ちに為れない〉である。纏めれば、「勢い良く育つ其処此処の新芽は滴る朝露さえ払う様だ」と言って、女の子の元気さを愛でる。と同時に、「行く末が覚束無い若草の子を遺すのが心配で死に切れない」と嘆いている。

また居たる（ゐたる、すると側居するもう一人の）大人（女房が）、「げに（まことに）」と、うち泣きて（貰い泣きして）、

「初草の生ひ行く末も知らぬまに、いかでか露の消えむとすらむ」（和歌 5-2）

「若君の御成長を見ぬ内に、先立つなどという法は御座いませぬ」（意訳 5-2）

*女房の立場で尼君のように素直に女子を愛でるのは、少なくとも尼君の前では憚られる。そこで尼君の懸念に同情する面だけにしか応えられない。ただそうなると、「露の消えむ」に〈元気を愛でる〉思いを掛けられないので、字数の韻は踏んでも歌に成っていない。駄目である。それでも、歌詞の「若草」を「初草」と言い換えて前節を準り、発句を受けた形には成っているので「如何であろうと元気が一番」という意は存在する。しかし、其の意を歌い上げる立場に無いので、意味は在っても其の面には黙って同意した事に為る。こうした事情は文字にすると禅問答めいた印象にもなるが、実際の縦横織り成す人間関係においては極く普通に在る日常会話だろうし、敢えて言うなら、駄目を出してまで其れを切り取った為時女の凄腕か。

と聞こゆるほどに（と応答していると）、僧都、あなたより来て（向こう側から来て）、

「こなたはあらはにやはべらむ（此方は外から丸見えなのでは御座いませぬか）。今日しも（けふしも、今日は何時に無く）、端に（はしに、外側の部屋に）おはしましけるかな（居らしたものですね）。この上の（かみの、先に登った）聖の方に（ひじりのかたに、聖人の岩屋に）、源氏の中将の瘧病（わらはやみ）まじなひに（祓いに）ものしたまひけるを（居らして御出でなのを）、ただ今なむ、聞きつけはべる（聞き付けて御座います）。いみじう（殊更に）忍びたまひければ（隠れていらしたので）、知りはべらで（今まで気付かずに）、ここにはべりながら（此処に居ながら）、御訪ひ（おんとぶらひ、お見舞い）にも（ひとつ）までざりける（申し上げてもおりません）」とのたまへば（とお話し為されたので）、

「あないみじや（あら大変）。いとあやしきさまを（とてもひどい格好を）、人や見つらむ（誰か見たかしら）」とて（と言って）、簾下ろしつ（尼君は簾を下ろさせた）。

「この世に、罵り給ふ（ののしりたまふ、その名聞こえた）光る源氏、かかるついでに（この機会に）見たてまつり（お目に掛かり）たまはむや（為されませんか）。世を捨てたる法師の心地にも、いみじう（甚だ）世の憂へ忘れ、齢延ぶる（よはひのぶる、寿命が延びる程に有難い）人の御ありさまなり（方の御姿なのです）。いで（さぁ）、御消息聞こえむ（御挨拶申し上げましょう）」

とて（と僧都が言って）、立つ音すれば（一同が立ち動く気配なので）、帰りたまひぬ（源氏と惟光も上の堂へお戻りになった）。

［第四段　若紫の君の素性を聞く］

「あはれなる人を見つるかな（趣きある人を見つけたものだ）。かかれば（これだから）、この好き者どもは（今日供に付いた女好き共は）、かかる歩きをのみして（こう出歩いてばかりいて）、よく（上手く能く）さるまじき人をも（意外な人までも）見つくるなりけり（見つけるものなのか）。たまさかに（少し）立ち出づるだに（外出しただけで）、かく（こう）思ひのほかなる（思いの他に面白い）ことを見るよ（事に出会えたのだから）」と、をかしう思す（と楽しく思う）。「さても（それにしても）、いと（とても）うつくしかりつる（可愛らしかった）児（ちご、童女）かな（だったものだ）。何人ならむ（如何いう身分の人なのだろう）。かの人の（意中の人＝藤壺宮の）御代はり（おんかはり、代わり）に、明け暮れの慰めにも（日々の慰めとして）見ばや（世話したいものだ）」と思ふ心、深う付きぬ（つきぬ、記した）。

うち臥したまへるに（横に成っておられると）、僧都の御弟子（みでし、住持が寺僧を遣いに立てて）、惟光を呼び出でさす（よびいでさす、惟光を呼ばせて伝言を聞かせた）。ほどなき所なれば（狭い所なので）、君もやがて聞きたまふ（源氏もそのままお聞きになる）。

「過り（よぎり、訪れ）おはしましけるよし（下されし由）、ただ今なむ（たった今）、人申すに（人から聞いて）、おどろきながら（驚きまして直ぐ）、さぶらべきを（御挨拶に参じるべきものの）、なにがし（拙僧が）この寺に籠もりはべりとは（この寺に籠もっている事は）、知ろし召しながら（しろしめしながら、御承知置き下されながら）、忍びさせたまへるを（隠れて御出で為されるのを）、憂はしく（うれはしく、不可解な事とも）思ひたまへてなむ（存じおりましたので）。草の（旅寝の）御むしろも（布団も、此処のような修行僧用の宿坊ではなく）、この坊に（拙僧が住まう草庵の方に）こそ設け侍る（まうけはべる、御支度致す）べけれ（べく、ように整えて居りますれば）。いと（まことに）本意なきこと（至らぬ事で、恐縮致します）」と申したまへり。

「いぬる（今月の）十余日（じゅうよにち、十何日）のほどより（くらいから）、瘧病にわづらひはべるを、度重なりて堪へがたうはべれば、人の教へ（をしへ、勧め）のまま、にはかに（急に）尋ね（お訪ねして）入りはべりつれど（入山致しておりますが）、かやうなる人の（あのように人が話した通りの）験（しるし、祈祷の効用）あらはさぬ時、はしたなかるべきも（人聞きが悪くなってしまうにしても）、ただなるよりは（普通の人よりは、私の様な身分の者の場合）、いとほしう（気の毒かと）思ひたまへ（考えて）つつみてなむ（遠慮いたしまして）、いたう（ごく）忍びはべりつる（内密に出向きました）。今、そなたにも（其方へ、伺います）」とのたまへり（と源氏は惟光から寺僧に伝えさせ為された）。

すなはち（遣いの寺僧が立ち返り源氏の返事を言伝てすなれは忽ち）、僧都参りたまへり（僧都が源氏の許に参り為された）。法師なれど（僧都は俗世を出た出家の身だが）、いと心恥づかしく（源氏が気後れするほど大変に立派で）人柄もやむごとなく（人柄も上品で）、世に思はれたまへる人なれば（広く尊敬されている人なので）、軽々しき御ありさまを（源氏は自分の粗末な身なりが）、

はしたなう思す(無礼ではないかと気が引ける思いに成られた)。僧都は源氏にかく籠もれるほどの御物語(経緯や暮らしぶり)など聞こえたまひて(お話し申し為されて)、「同じ(此処と同じ)柴の(しばの、有り触れた粗末な)庵(いほり、仮家)なれど、すこし涼しき水の流れも御覧ぜさせむ(ごらんに入れましょう)」と、せちに聞こえたまへば(切に申し上げ為されたので、源氏は)、かの、まだ見ぬ(みぬ、自分を見知っていない)人びとに(小柴垣の僧都の家に居た人たちに)ことことしう(僧都が源氏の事を殊更大層に)言ひ聞かせつるを(言い聞かせていたのを)、つつましう思せど(気恥ずかしくお思いに為ったが)、あはれなりつる(趣き深い)ありさまも(御様子も)いぶかしくて(心惹かれて)、おはしぬ(僧都の坊へ移って行かれた)。

げに(確かに)、いと(相当)心ことに(丹念な)よしありて(凝った作りで)、同じ木草をも(同じ木や草で端正に型取って)植ゑなしたまへり(植え込みを拵えてあった)。月もなきころなれば(月の無い弥生月末の月篭りなれば)、遣水(やりみず、庭の小川)に(の辺りに)篝火(かがりび、火を高く焚きかざし)ともし、灯籠(とうろう、提灯)なども参りたり(吊ってある)。南面(みなみおもて)いと清げに(とても整然と)設ひ給へり(しつらひたまへり、源氏の寝室が作られてあった)。空薫物(そらだきもの、隠し香)、いと心にくく薫り出で、名香の香(みゃうがうのか、仏前香の香り)など匂ひみちたるに、君の御追風(おんおひかぜ、衣に焚き込めた香)いと殊(こと、格別)なれば、内(うち、奥に居る女房たち)の人びとも心遣い(こころづかひ、緊張して)すべかめり(粗相の無い様に気を付けていた様だった)。

僧都、世の常なき御物語、後世(のちせ、来世)のことなど聞こえ(源氏に申し上げ)知らせたまふ(訓え為された)。我が罪のほど(聞いた源氏は自分の罪深さに)恐ろしう(恐れ入って)、「あぢきなきことに心をしめて(適わぬ思いに囚われて)、生ける限りこれを思ひ悩むべき(なやむべき、悩み続ける)なめり(もののようだ)。まして後の世のいみじかるべき(まして来世の因果の報いが思い遣られる)」。思し続けて、かうやうなる(こうした)住まひも(出家暮らしも)せまほしう(してみたいと)おぼえたまふものから(お思いに為る一方で)、昼の面影心にかかりて恋しければ、

「ここにものしたまふは(此処に居る方は)、誰れにか(たれにか、誰ですか)。尋ねきこえ(貴僧に御訪ね申し)まほしき(上げたい)夢を見たまへし(夢を見た事があるような)かな(気がします)。今日なむ(今日それが)思ひあはせつる(何だったのか思い当たりました)」

と聞こえたまへば(と源氏がお話しなさると)、うち笑ひて(僧都は和やかに)、

「うちつけなる(唐突な)御夢語りにぞ(夢のお話では)はべるなる(御座います)。尋ねさせたまひても(誰とお知りに為られても)、御心劣り(御失望を)せさせたまひぬべし(為さる事で御座いましょう)。故*按察使大納言(こあぜちのだいなごん)は、世になくて久しくなりはべりぬれば(大分前に亡くなっているので)、え知ろし召さじかし(御存知ありますまい)。その北の方なむ(その妻だった者が)、なにがしが(拙僧の)妹にはべる(妹で御座います)。かの按察使かくれて後(未亡人となってから)、世を背きてはべるが(出家いたしておりましたが)、このごろ、わづらふことはべるにより(病気になりましたので)、かく京にもまかでねば(このように京都にも出向かずに)、頼もし所に(此処を頼りにして)籠もりてものしはべるなり(籠もっているので御座います)」と聞

こえたまふ(と申し上げる)。　*「按察使(あぜち)」は奈良時代、国司の施政や諸国の民情などを巡回視察した官。平安時代には陸奥(むつ)・出羽だけを任地とし、大・中納言の名目上の兼職となった、とのこと。

「かの大納言の(その大納言には)御女(みむすめ)、ものしたまふと聞きたまへしは(をお持ちだったと耳にしましたが、その娘御は如何されましたか)。好き好きしき方にはあらで(色目当てでは無しに)、まめやかに聞こゆるなり(経緯としてお訪ねしております)」と、推し当てに(おしあてに、当て推量で)のたまへば(源氏がお聞きに為ると僧都は)、

「女(むすめ)ただ一人侍りし(はべりし、居りました)。亡せて、この十余年にやなりはべりぬらむ。故大納言、内裏にたてまつらむなど(入内させようと)、賢う傅き侍りしを(かしこういつきはべりしを、大事に可愛がって育てていましたが)、その本意のごとくもものしはべらで(その本意を叶える間も無く)、過ぎはべりにしかば(亡くなってしまいましたので)、ただこの尼君一人持て扱ひ侍りし(もてあつかひはべりし、世話を焼いて育てていました)ほどに、いかなる人のしわざにか(誰の取次ぎにてか)、*兵部卿宮(ひゃうぶきゃうのみや)なむ、忍びて語らひ付きたまへりけるを(忍び通い為されていましたが)、本の(もとの、兵部卿宮の本妻たる)北の方、やむごとなくなどして(身分の高い方で辛く当たるなどしたもので)、安からぬこと多くて(姫は気苦労が絶えず)、明け暮れ物を思ひてなむ(始終思い悩むうちに)、亡くなりはべりにし(亡くなってしまわれました)。物思ひに病づくものと(心配事から病になるものだと)、目に近く見たまへし(目の当たりに致した次第です)」　*「兵部卿宮」は藤壺女御の兄で、先帝の御子たる親王と言う貴人である。

など申したまふ(など申し為さる)。「さらば(では)、その子なりけり(兵部卿宮の子だったのか)」と思しあはせつ(と源氏は思い合わされた)。「親王の御筋(みこのおんすぢ)にて、かの人にもかよひきこえたるにや(藤壺宮にも似通って見えたのだな)」と、いとどあはれに(いっそう心惹かれて)見まほし(側に置きたい)。「人のほども(血筋は)貴に趣しう(あてにをかしう、高貴だが傍流で)、なかなかの(中途半端な)賢しら心(さかしらごころ、利口ぶる気持ー小賢しさ)なく、うち語らひて(親しく接して)、心のままに教へ(理想通りに)生ほし立てて(育て上げて)見ばや(見ようか)」と思す(と考える)。

「いとあはれにものしたまふことかな(それは可哀想な事でした)。それは(それで)、とどめたまふ形見もなきか(その方には忘れ形見も無いのですか)」

と(と源氏が)、幼かりつる行方の(幼かった子の経緯を)、なほ確かに知らまほしくて(詳しく知ろうと)、問ひたまへば(お尋ねになると)、

「亡くなりはべりしほどにこそ(亡くなります頃ほどに)、はべりしか(生まれたでしょうか)。それも、女にてぞ(女の子で御座いました)。それにつけて(その事が拙僧の妹なる尼御の)物思ひのもよほしになむ(悩みの種のようでして)、齢の末に(よはひのすゑ、死期を前の心残りに)思ひたまへ(思い為されて)嘆きはべるめる(嘆いているようです)」と聞こえたまふ(と僧都はお答え申し為される)。

「さればよ(やっぱりそうか、だったらさ)」と思さる(と源氏はお考えに為る)。

「あやしきことなれど(妙な事を言うようですが)、幼き御後見に思すべく(私を其の幼子の後見者とお思い下さるよう妹尼に)、聞こえたまひてむや(申し上げて下さいませんか)。思ふ心ありて(思う所があって)、行きかかづらふ方も(結婚も)はべりながら(していながら)、世に(其の夫婦関係に)心の染まぬにやあらむ(馴染め切れず)、独り住みにてのみなむ(一人住まいを続けています)。まだ似げなきほどと(まだ其の子が幼すぎて結婚には早すぎると)常の人に思しなずらへて(普通にお考えになって)、はしたなくや(御迷惑に思われるでしょうか)」などのたまへば(などとお話し為されると、僧都は)、

「いとうれしかるべき仰せ言なるを(大変光栄なお話しですが)、まだむげに(まだ何と言っても)いはきなきほどに(幼過ぎる)はべるめれば(ものですので)、たはぶれにても(遊び心にしても)、御覧じがたくや(世話を焼き切れ為されぬかと、存じますが)。そもそも(もっとも)、女人は(にょにんは、女というものは)、人にもてなされて(男に躾けられて)大人にもなりたまふものなれば(一人前にも成るものですから)、詳しくは(込み入った話は)えとり申さず(取り次がずに)、かの祖母に(おばに、大体の事を祖母に)語らひはべりて(話し伝えてから)聞こえさせむ(御返事申し上げます)」

と、すくよかに言ひて(整然と応えて)、ものごはきさま(物強き様、居を正した姿勢を)したまへれば(取り続けたので)、若き御心に(わかきみこころに、若い源氏は)恥づかしくて(極まり悪くなって)、えよくも聞こえたまはず(それ以上はお話し出来為されなかった)。

「阿弥陀仏ものしたまふ堂に(阿弥陀仏を頂く堂で)、することはべるころになむ(念仏行を営む時間になりました)。初夜(そや、戌の刻ほぼ八時の読経)、いまだ勤めはべらず(まだ行っておりません)。過ぐしてさぶらはむ(済ませて参ります)」とて(と言って僧都は)、上りたまひぬ(修行堂に上って行かれた)。

君は、心地もいと悩ましきに(体調も優れなかったが)、雨すこしうちそそき(雨が少し降り注いで)、山風ひややかに吹きたるに、滝の淀み(たきのよどみ、滝壷の水嵩)もまさりて(も多くなって)、音高う聞こゆ(滝音が大きい)。すこしねぶたげなる読経の絶え絶え凄く(すごく、不気味に)聞こゆるなど、すずろなる人も(無粋な者でも)、所から(場所柄からして)ものあはれなり(何処か物悲しい)。まして(まして源氏は)、思しめぐらすこと多くて(悩み多くして)、まどろませたまはず(とても寝付け成されない)。初夜(しょや、初更いぬのとき八時)と言ひしかども、夜もいたう更けにけり。内にも(奥の間でも)、人の寝ぬ気這ひ著くて(けはひしるくて、様子が良く知れて)、いと忍びたれど(相当気を使って静かにしているようだが)、数珠の脇息に引き鳴らさるる音ほの聞こえ(数珠が肘掛に触る音が微かに聞こえて)、なつかしう(心和む)うちそよめく音なひ(衣擦れの響き)、貴はかなり(あてはかなり、優雅なもの)と聞きたまひて、ほどもなく(然程広くも無い部屋で奥の間も)近ければ、外に(とに、仕切りに)立てわたしたる(立て開いた二隻にせきの対ついで一双いっそうの)屏風の中を(なかを、間の合わせ目を手前に)、すこし引き開けて、扇を鳴らしたまへば(人を呼ぶように扇を打ち鳴らし為さると)、おぼえなき心地すべかめれど(心当たりの無いままに)、聞き知らぬやうにやとて(音を聞いては知らぬ振りも出来ないと)、居座り(ゐざり、膝を進めて)出づる人あなり(屏風の前に出て来た人が居るようだ。そして一度近付いては)。すこし退きて(しぞきて)、

「あやし(変ですね)、ひが耳にや(聞き違えでしょうか)」とたどるを(と様子見するのを)、聞きたまひて(源氏はお聞きに為って)、

「仏の御導べ(おんしるべ、お導き)は、*暗きに入りても(迷っても)、さらに(決して)違ふまじかなるものを(間違う事は無いものを)」　*仏教用語で「暗きに入る」は「煩悩に迷う」ことなのだそうで、釈迦の教えで真理を悟るという修行に擬えた源氏の言い回し、ということらしい。また「暗き」は「冥き」に通じて、「冥き途」即ち「冥土＝あの世」へと掛かる仏教の縁語でもある、という。こういう以って回った言い方をしなくても、「聞き違えではありません、御遣いをお願いしたく御呼び立てしました」、と其のまま言ったほうが源氏の好感が上がる様に思うのは私だけなのだろうか。源氏にこういう言い方をさせる紫工房の設定は私には少々面倒臭い。それとも聞き手は是を、僧坊での会話らしい気の利いた言い回しだと感じたのだろうか。確かに、此の「気の利いた」というか胡散臭い源氏の言い回しで、もし此の台詞を受けた相手が上手く切り返せば、此処の非常に危うい舞台設定を破綻無く纏める事は出来そうだ。是は丁度、方違えで押掛けた紀伊守邸で源氏が紀伊守に「女の世話はないのか」という言い方で接待の礼を述べた場面に似ている。紀伊守が「好みを聞いていなかったので」と言って謝りながら源氏の礼辞への見事な答辞をしたことで、場の和みが演出されると同時に設定の強引さも和らげる、という手法だった。あの場合でも私は腑に落ちない気分を抱きつつも、雲上人の世界なら有り得る事なのかと渋々納得した。ただ、事実は小説よりも奇なり、と言う様に、実際に奇妙な出来事が、奇妙な経緯で起こることは少なくない。だから、むしろ此処の場面も似た様な事が実際に在ったのだろう、と思いたい。渋々ととは、驚きを持ってと言うことにしておこう。とすれば弥が上にも、女房の応対振りが注目される。

とのたまふ御声(おんこゑ)の、いと若う貴なるに(あてなるに、上品なので)、うち出でむ(其の女房は御返事に)声づかひも(声を出すのも)、恥づかしけれど(気が引けたが)、

「いかなる方の(どのような事を)、*御しるべにか(御遣いするのか)。おぼつかなく(分かりかねますが)」と聞こゆ(と申し上げる)。　*源氏は「御しるべ」を〈仏の導き〉として、「仏に仕える御方が間違える筈は無い」と言って、女房をと言うより其の主人の尼君を持ち上げるイヤラシサで話し掛けた。其れを受けた女房は源氏のイヤラシサを十分に心得た上で同じ「御しるべ」という言葉を使って答える。それも「御しるべ」を〈源氏の御遣い〉と読み替えて、自分は其の御用を承るという立場で応える。この機知に富んだ女房の妥当な切り返しで、両者の会話が僧坊での遣り取りらしくなって、臨場感が増した、と思いたい。

「げに(確かに)、うちつけなりと(唐突な事と)おぼめきたまはむも(不審に思われるのも)、道理なれど(御尤もですが)、

初草の若葉の上を見つるより、旅寝の袖も露ぞ乾かぬ　(和歌 5－3)

あんまり若葉がきれいなもので、枕の袖にも緑(見取り)が染みます　(意訳 5－3)

＊この歌は柴垣から覗いた源氏の立場では、「御見掛けした未だ幼い少女の姿が目に焼きついて横に為っても目蓋から離れません」、となる。また、源氏から後見の話を相談された僧都の立場では、「幼子の成長振りを見守れる以外には無念さに私の涙が乾く事は無い」という源氏の気持を知る事になる。しかし今、この歌を聞いたばかりの女房延いては尼君は、源氏の覗き見も後見話も聞いていないのだから、源氏が何を言っているのか訳が分からない。それでも前者の意味なら、即物的に若葉を愛でたものとして、「若葉」を誰とも分からないまでも、歌の辻褄だけは理解できるだろう。そして其の上で誰が「若葉」かを推察すれば、「初草の若葉」と歌い出しているのだから、この僧坊に

居る者の中で考えれば、幼君以外には在りえない。まして、この歌を源氏から直接聞いた女房が「初草の生ひ行く末も知らぬまに、いかでか露の消えむとすらむ(和歌 5-2)」を詠んだ女房なら、源氏は「初草」という言葉を受けているのだから、夕暮れの柴垣に源氏が居たことをはっきりと知らされた事に為る。そして、其「の上を見つるより(すがたを見たので)」と歌い継いで〈見た〉とはっきり言っているのだから、他の女房や尼君にしても、僧都が外から丸見えだと注意した庭先での夕暮れからの経緯を思い合わせれば、源氏が其の時に垣間見たであろう事以外に考えようが無い。つまり此処で源氏は柴垣からの覗き見を告白していて、事実上は僧都を跳び越して直接尼君に、幼君への求婚を申し入れた事に為っている訳だ。

と聞こえたまひてむや(と申し上げて下さりませ)」とのたまふ(と源氏は言われた)。

「さらに(ますます分かりません)、かやうの(こうした)御消息(おんせうそこ、御伝言の御遣いを)、うけたまはり(承わっても)分く可き人も(わくべきひとも、お届け先も)ものしたまはぬさまは(お示しの無いままでは)、しろしめしたりげなるを(お目当ての方がいらっしゃるようですが)。誰れにかは(どなた宛でしょうか)」と聞こゆ(と女房は申し上げる)。

「おのづから(実際に)さるやうありて(そのように泣けて来たから)聞こゆるならむと(申し上げたものなのだと)思ひなしたまへかし(お思いに為って下さい)」

とのたまへば(と源氏が仰ったので)、入りて聞こゆ(女房は奥へ戻って源氏の言葉通りを尼君にお伝え申した)。

「あな(あら)、今めかし(今時な)。この君や(このお嬢を)、世づいたるほどに(お年頃に)おはするとぞ(御成りかと)、思すらむ(お思いなのでしょうか)。さるにては(だとしても)、かの(先に私が詠んだ)『*若草』(という)を(歌詞を)、いかで(どうして)聞いたまへる(お知りに成っている)ことぞ(のでしょうか)」と、さまざまあやしきに(あれこれ疑わしく)、心乱れて(困惑したが)、久しうなれば(返歌が遅くなっては)、情けなしとて(失礼かと)、　*正確には、源氏が詠んだのは「初草の若葉」であって、「初草」は彼の時の女房の返歌にあった言葉だったが、意味としては「初草の若葉」は「若草」であり、夕暮れの庭先での遣り取りを源氏が見ていた事の〈告白〉である。それを「いかで聞い給へる事ぞ」とは、女房への疑いが向きそうだが、女房と源氏が見知っていない事は尼君も知っているので、妙なお惚けに感じる。

「枕結ふ今宵ばかりの露けさを、深山の苔に比べざらなむ　(和歌 5－4)

「枕は干せば乾くけど、干すに干せない苔むす岩根　(意訳 5－4)

乾がたう(ひがたう、乾きにくい)はべるものを(ものですので)」と聞こえたまふ(と女房を遣って源氏に申し上げた)。

「かうやうのついでなる御消息は(こうした伝言での御尋ねでは)、まださらに聞こえ知らず(込み入ったお話は)、ならはぬことになむ(覚束無いものです)。かたじけなくとも(失礼ながら)、かかるついでに(この際に)、まめまめしう(折り入って)聞こえさすべきことなむ(お話ししたい事が御座います)」と聞こえたまへれば(と源氏が申し為されれば)、尼君、

「ひがこと(空言でも)聞きたまへるならむ(お聞きになったのでしょう)。いとむつかしき御けはひに(とても恐れ多い御様子に)、何ごとをかは(どう言って)答へきこえむ(お答え出来ましょうか)」とのたまへば(とおっしゃると)、

「はしたなうもこそ思せ(お答え為さらないと、先様に失礼なのでは御座いませんか)」と人びと聞こゆ(と女房たちが謙遜も過ぎれば非礼に当たると尼君に源氏との面会を勧めた。そこで尼君は、)。

「げに(確かに)、若やかなる人こそ(若い人なら)うたてもあらめ(不都合もあろうが)、まめやかにのたまふ(折り入っての仰せとは)、かたじけなし(勿体無いことで)」

とて、ゐざり寄りたまへり(膝を進められた)。

「うちつけに(不躾で)、あさはかなりと(思慮も浅いと)、御覧ぜられぬ(思われても)べきついでなれど(当然の次第ですが)、心にはさも(決してそのような)おぼえはべらねば(思い付きでは御座いませんので)。仏はおのづから(仏に仕えなさる尼君なら自ずから、幼子と私の深い宿縁を既にご存知かと)」

とて(などと源氏は話し為されたとて、尼君は)、おとなおとなしう(大人びて落ち着いて)、恥づかしげなるに(居を正したままなので、源氏も緊張して)つつまれて(縮こまって)、とみにも(直ぐには)えうち出でたまはず(とても肝心な話を切り出し為されない。すると尼君が、)。

「げに(仰る通り)、思ひたまへ寄りがたき(お考え付き難い＝偶然とも思える)ついでに(こうした機会に)、かくまで(このように)のたまはせ(お話し頂き)、聞こえさするも(お話しさせて頂くのも)、いかが(何か、の御縁かと存じます)」とのたまふ(と話される。そこで源氏が、)。

「あはれに(母君を亡くされてお気の毒にと)うけたまはる(お聞き申した)御ありさまを(幼君の御境遇のようですが)、かの過ぎたまひにけむ(其の亡くなられた)御かはりに(母君の代わりにと)、思しないてむや(私を思い見做して下さりませんか)。言ふかひなきほどの齢にて(私も物心付かぬ幼少時に)、むつましかるべき人にも(親しく頼る母や祖母に)立ち後れはべりにければ(先立たれておりますので)、あやしう浮きたるやうにて(何処か落ち着かぬままに)、年月(としつき)をこそ(ばかりを)重ねはべれ(過ごしております)。同じさまにものしたまふなるを(同じ境遇同士で)、たぐひになさせたまへと(結ばせて頂きたいと)、いと聞こえまほしきを(熱望しておりまして)、かかる折はべりがたくてなむ(このような機会は又と無いものと)、思されむところをも憚らず(一方的に)、うち出ではべりぬる(打ち明けて居る次第です)」と聞こえたまへば(と申し上げ為されば、尼君は)、

「いとうれしう思ひたまへぬべき御ことながらも(大変光栄なお話しで御座いますが)、聞こしめし(お聞きあそばして)ひがめたること(取り違え為されている事)などやはべらむと(などがお在りではないのかと)、つつましうなむ(恐れ入って御座います)。あやしき身一つを(不甲斐ない此の身だけを)頼もし人にする人なむはべれど(頼りにしている子なら居りますが)、いとまだ言ふかひなきほどにて(さすがに幼子にて)、御覧じ許さるる方も(お相手に適うとは)はべりがたげ

なれば(とても思われませんので)、えなむ(とてもとても)うけたまはりとどめられざりける(そのような御話しはお受け致し兼ねまする)」とのたまふ(と仰る。源氏は、)。

「みな(それもこれも)、おぼつかなからず(十分に)うけたまはるものを(承知の上での事ですので)、所狭う(ところせう、堅苦しく)思し憚らで(おぼしはばからで、お考えにならず)、思ひたまへ寄るさま(思いをお寄せするのも)ことなる心のほどを(一通りではない此の気持を)、御覧ぜよ(お分かり下さい)」

と聞こえたまへど(と申し上げ為されたが、尼君は幼君が)、いと似げなきことを(本当にまだ子供だということを)、さも知らでのたまふ(そうと知らずに源氏が述べ給うもの)、と思して(とお考えになって)、心解けたる御答へもなし(真に受けた御返事も無い)。僧都おはしぬれば(そんな時に僧都がお戻りに成って来たので、源氏は)、

「よし(では)、かう(このように)聞こえそめ(申し入れて)はべりぬれば(おきましたので)、いと頼もしうなむ(本当に楽しみです＝宜しくお願い致します)」とて(と言って)、おし立てたまひつ(屏風を元の様に押し立てに為った。そして、この日は此処までと皆寝入った。)。

暁方(あかつきがた、日の出前の夜明け)になりにければ、法華三昧(ほっけざんまい、道場修行)行ふ堂の懺法(せんぼふ、法華経巻音読)の声、山おろしにつきて(山おろしの風に乗って)聞こえくる、いと尊く、滝の音に響き合ひたり。(そこで、源氏は感慨深くこう詠んだ。)

「吹きまよふ深山おろしに夢さめて、涙もよほす滝の音かな」(和歌 5－5)

「木々を震わす山風と胸を震わす滝の音」(意訳 5－5)

「さしぐみに袖ぬらしける山水に、澄める心は騒ぎやはする　(和歌 5－6)

「なれそめと思うみどりの袖枕、鶴は千年亀は万年　(意訳 5－6)

耳馴れはべりにけりや(どうと言うほどの事でも御座いません)」と聞こえたまふ(と僧都はお応え申し為された)。

[第五段　翌日、迎えの人々と共に帰京]

明けゆく空は、いといたう霞みて、山の鳥どもそこはかとなうさへづりあひたり。名も知らぬ木草の花どもも、いろいろに散りまじり、錦を敷けると見ゆるに(錦の織物を敷詰めた様に美しく見える所に)、鹿の佇み歩く(しかのたたずみありくも、鹿が長閑に歩く景色を)、めづらしく見たまふに(珍しく御覧になる内に源氏は)、悩ましさも紛れ果てぬ(病の憂さもすっかり晴れていらした)。

聖(ひじり、岩屋の大徳は)、動きも得(え、侭)せねど(為らないが)、とかうして(あれこれと寺僧の手を借りて)護身(ごしん、源氏の為に清めの念を奉るべく)参らせたまふ(住持坊まで参じ御出で為された)。かれたる声の、いといたう隙僻める(すきひがめる、歯の間から息が漏れて聞

き取りにくい)も(のも)、あはれに(修行の程が偲ばれて)功づきて(くどづきて、功徳御利益が在りそうで有難く)、陀羅尼(だらに、インド古語原典の呪文)誦みたり(よみたり、唱えた)。

御迎への人びと参りて(迎えの供人たちが遣って来て)、おこたり(快復)たまへる(成された)喜び聞こえ(お祝いを申し上げ)、内裏よりも御とぶらひあり(御所からの見舞いの使者も遣って来た)。僧都、世に見えぬさまの御くだもの(珍しいお菓子を)、何くれと、谷の底まで堀り出で(労苦を厭わず)、いとなみきこえたまふ(御持て成し為された)。

「今年ばかりの誓ひ(今年いっぱいまでの山籠り修行を)深うはべりて(固く誓っておりますので)、御送りにもえ参りはべるまじきこと(お見送りに御供出来ませんのが)。なかなかにも(心苦しく)思ひたまへらるべきかな(存じ上げられます)」

など聞こえたまひて(など申し為されて)、大御酒(おほみき、君へ御酒を)参りたまふ(差し上げ為される。すると、)。

「山水に(やまみずに、山の風情に)心とまりはべりぬれど(お名残惜しゅう御座いますが)、内裏よりもおぼつかながらせたまへるも(帝に御心配をお掛け申しては)、かしこければなむ(畏れ多い事ですので、御暇致します)。今(また直ぐに)、この花の折過ぐさず(この花が散る前には)参り来む(改めて御礼に参ります)。

宮人に行きて語らむ山桜、風よりさきに来ても見るべく」(和歌 5-7)

帰って宮中の者たちに此処の山桜の見事さを話して聞かせましょう、風に舞い散る前に見に来るようにと」(意訳 5-7)　*此の歌は単に、ごく日常的な挨拶なので替え歌の作り様が無い。では、ただの挨拶を調子よく言っただけ、なのかと言えば、左うでも在り然うでも無い。御子たる源氏の君が「宮人に行きて語らむ」ことの〈晴れがましさ〉は、僧都にとって如何なる他の美辞麗句を以ってしても謳い上げ切れない礼辞である。傍目では権力者の厭味とも見えかねないが、此処は素直に僧都の立場に為ってみれば、源氏なればこそに歌い上げられる華やかさを味わう事が出来る。

とのたまふ御もてなし(と話し為される源氏の応対振りや)、声づかひさへ(詠いっぷりも)、目もあやなるに(見事だったので僧都が)、

「優曇華の花待ち得たる心地して、深山桜に目こそ移らね」(和歌 5-8)

*「優曇華(うどんげ)」とは、三千年に一度花が咲き、其の時に仏が世に出現すると言う、架空の植物、との事で、稀な事の例え、とある(小学館古語辞典他)。

「殿にお会いすると貴花を見る思いで、山桜など目に入りません」(意訳 5-8)　*此方も単なる答辞なので替え歌にしても意味は無い。ただの煽て追従だが、僧都らしい言い回しと考えて、この場限りの典雅さに思いを馳せるしか無さそうだ。

と聞こえたまへば（と申し為されると源氏は）、ほほゑみて、「時ありて(もし今が其の三千年に一度の時として)、一度開くなるは(ひとたびひらくなるは、仏がお救い下されるなら)、かたかなるものを(有難い事です)」とのたまふ(とお話に為る)。

聖、御土器賜はりて(おんかはらけたまはりて、素焼きの盃で御流れを頂戴して)、

「奥山の松のとぼそをまれに開けて、まだ見ぬ花の顔を見るかな」(和歌 5-9)

「修行した甲斐がありました、それでは拝見いたします」(意訳 5-9)

*此処は、聖が君と僧都の遣り取りを受けて詠んだのだから、君を優曇華に見立てて改めて其の御尊顔を拝見いたします、と言う場面。実際に歌詞の中でも、「奥山の松」と歌い出す事で君と僧都の「山桜」を受けている。また同時に優曇華を念頭に置いて、〈仏門入りして(山)長く(奥)求めてきた(松＝待つ)〉と前振りしている。「とぼそ」は〈戸の臍ホゾ〉で〈戸の軸受け〉または〈戸〉自体を指す言葉というが、〈戸〉は〈門〉であり〈其の折〉である。「稀に開けて」は〈偶々開いて〉だが、優曇華を受けているから〈滅多に無い事が起きたかと＝仏の御来臨が在るのかと〉との意を示す。さらに聖は態々、源氏に対して「そをまれに」即ち〈そうなのかと目直に〉と言うことで、自らの臨場感を挿入している。従って前節は非常に重層的な表現となっていて、「それでは改めて殿の御尊顔を入道以来待ち焦がれてきた仏様御来臨の兆しとして」という仰々しさで、遂に後節では「では有難く拝見いたします」と、源氏を仏の化身くらいにまで祭り上げてしまった。俗世でなら丸でヨイショの歌だが、命懸けの修行をしている大徳の歌である。心して聞くべきだろうか、どうなんだろう。落語家なら恍惚の人の歌とでも言い放ちそうだ。

と、うち泣きて見たてまつる(と涙を流して君を拝顔為される)。聖、御まもりに、*独鈷たてまつる(煩悩の祓い切りを施したトコを源氏のお守りに差し上げた)。見たまひて、僧都、聖徳太子(しょうとこたいし)の百済(くたら)より得たまへりける*金剛子(こんがうし)の数珠の、玉の装束したる(宝玉の飾りが付いているものを)、やがて(そのまま)その国より入れたる筥の(はこの、箱で)、唐めいたるを(唐風なものを)、透きたる(薄地の)袋に入れて、五葉(ごえふ、五葉松)の枝に付けて(差し上げる。また其の他には)、紺瑠璃(こんるり、青い瑠璃宝石で作った)の壺どもに、御薬ども入れて、藤、桜などに付けて、所につけたる(如何にも山寺らしい)御贈物ども、ささげたてまつりたまふ(捧げ奉り為さる)。　*「独鈷(とこ)」は真言密教で用いる左右対称の杵状の仏具で武器からの転用、という。修行者自身の精神鍛錬を重要視する密教においての煩悩を断つ法と、病魔の御祓いとでは別の概念にも思えるが、病は気からと言う大きな括りでは破綻も無いのだろうか。尤も個人用の御守りとしては、顕教より密教の施しのほうが相応しいような気もするが。いずれにしても此処の場面での主眼は、源氏が多くの贈り物で丁重な持て成しを受けた、という所にあるらしい。　*「金剛子」とは、モクゲンジの木の実。黒色で堅く、丸くて六つの角がある。糸に通して数珠にする(Yahoo 辞書)、という。「モクゲンジ」は「モクレンジ」の別名で、ムクロジ科の落葉高木とあり、高さ約 10 メートル。葉は羽状複葉。小葉は卵形で縁に不規則なぎざぎざがある。夏、枝先に黄色い小花を群生。実は三角形の袋状をし、中の種子は黒色で堅く、金剛子といい数珠に用いる。中国地方の日本海側に自生がみられる。楝葉(せんだんば)の菩提樹。もくれんじ(Yahoo 辞書)、とある。

君(源氏は)、聖よりはじめ(聖人をはじめ)、読経しつる法師の(読経した山寺の僧法たちへの)布施ども(謝礼の品々や)、設けの物ども(まうけのものども、御馳走の数々を)、さまざまに取りにつかはしたりければ(昨日京に帰した供人に用意させて届けさせたので)、そのわたりの(其の

寺近隣の)山がつまで(山働きするものまで)、さるべき物ども賜ひ(其々に施し為されて)、御誦経(みずきゃう、祈祷の御礼)などして(などとしてから)出でたまふ(僧坊の外へ御出に成る)。

内に(すると奥の間に)僧都入りたまひて(僧都は一度お入りになって)、かの聞こえたまひしこと(君が幼君の後見をしたいという例の頼まれ事を)、まねびきこえたまへど(尼君にそのまま取り次ぎ申されたが、尼君は)、

「ともかくも、ただ今は、聞こえむかたなし(御答えしようも御座いません)。もし、御志あらば(君に其のお気持ちが御在りなのでしたら)、いま四、五年(よとせいつとせ)を過ぐしてこそは(経た後であるならば)、ともかくも」とのたまへば(とお返事なさるので、聞かれた源氏は)、「さなむ(まだ然様な事を)」と同じさまにのみあるを(と昨夜と同様な答えに)、本意なし(ほいなし、気持ちが伝わっていないようだと)と思す(とお思いに為る。そこで源氏は尼君への、)。

御消息(お手紙を)、僧都のもとなる(僧都に仕える)小さき童して(稚児を遣いに立てた)、

「夕まぐれほのかに花の色を見て、今朝は霞の立ちぞわづらふ」(和歌 5-10)

「見て知ってると言ったのに、まだ真に受けて貰えませんか」(意訳 5-10)

*「夕暮れに紛れてこっそり見たと言ったのに、今朝になって雲夜霧闇(有耶無耶)にしようと為さるのでは困ります」という気持ちを、風情粧して和らげて詠んでいる。源氏の人となりは、私にとって殆ど気に入らないが、この歌に関しては良く分かるというか、経緯を考えれば少しだけ共感出来る。確かに源氏は僧都にこそは、少女の覗き見を打ち明けないままで、とはいえ僧都は源氏の覗き見を窺い知ってはいた様だが、其の素姓を探ったが、尼君に対しては初めから、覗き見を打ち明けていた。だから源氏は尼君に、少女の姿を覗き見した事は直接に、其の生い立ちのあらましを知った事は僧都を通して、断った上で幼君の貰い受けを申し入れていた、という事に成る。其れにも関らず尼君は頑なに、源氏の思い違いの一点張りで固辞している。普通の場合なら、可愛い孫を手許で育てたい尼君の気持ちの方が正当に思われるが、源氏は御子なのである。親王を外れ臣籍降下したとはいえ、今上帝からは破格の厚遇を受け、左大臣家の婿としての実権も持つ、其の才と美貌も特に優れた貴人である。尼君にしてみれば、大納言の未亡人という余裕の無い自分の立場からして、これ以上望むべくも無い幸運ではないか。貴人に添って余裕を持って生きることは物理的に楽なので、人がみな其れを望むのは当然だろう。尤も、それ自体は尊い事に違いないが有為に過ごせなければ、薄っぺらな人生に終わる、という見方はある。少なくとも其の可能性を寒々しく予期せざるを得ない、とは言えるのだろう。その意味では、余裕の無い人生は良し悪しは別として、熱い事だけは確かだろう。所謂、ハングリー精神なるものか。ただ例え其うであっても、悪しの危険性を回避する切実な事情を慮って、この場面だけに限って言えば、固辞するほうが奇怪しい。

御返し(尼君の御返歌は)、

「まことにや花のあたりは立ち憂きと、霞むる空の気色をも見む」(和歌 5-11)

「何だか良く分かりませんねえ、空まで霞んでおりますし」(意訳 5-11)

*「本当の所はどうなんですか、霞んだ空を見るようです」と此方も、風情粧して和らげて詠んではいるが、不審な気持ちを露にしている。正当性は疑問だが、痛快とも言える遠慮の無さではある。

と、よしある手の(教養高い見事な手並みで)、いとあてなるを(大変上品だが)、うち捨て書いたまへり(言葉以上に醒めた冷静な筆跡で書かれていた)。

御車にたてまつるほど(今は此れまでと源氏が御車の人に成ろうかと言う時に)、大殿より(左大臣家から)、「いづちともなくて(行く先もお告げにならないで)、おはしましにけること(お出かけ為されては、困ります)」とて(との養父の苦言を携えて)、御迎への人びと、君達などあまた参りたまへり。頭中将、左中弁、さらぬ(その他の)君達も(御子息たちも)慕ひきこえて(御心配申し上げて)、

「かうやうの(こうした折の)御供には、仕うまつりはべらむ(御仕え致しまする)、と思ひたまふるを(と存じておりましたものを)、あさましく(残念ながら)、おくらさせたまへること(後に為されましたとは)」と恨みきこえて(と恨み申し上げては、また)、「いと(何とも)いみじき花の蔭に(見事な花の下に在って)、しばしもやすらはず(少しも憩いの時を持たず)、立ち帰りはべらむは(直ぐ帰るだけとは)、飽かぬわざかな(惜しい事です)」とのたまふ(と申される)。

岩隠れの苔の上に並みゐて(岩陰の苔生した所に君達は並び座して)、土器参る(かはらけまゐる、御酒を召し上がる)。落ち来る水のさまなど、ゆゑある(風情ある)滝のもとなり(滝のふもとであった)。頭中将、懐なりける笛(ふえ、横笛)取り出でて、吹きすましたり。弁の君、扇はかなう(扇で軽妙に拍子を)うち鳴らして、「*豊浦の寺の、西なるや」と歌ふ。人よりは(この両名は人並ならぬ)異なる君達を(優れた器量の君達だったが)、源氏の君、いといたううち悩みて(病み上がりでかなり酷く疲れた様子で)、岩に寄りゐたまへるは(岩に寄りかかって居られるお姿が)、たぐひなく(比べ様も無く)ゆゆしき御ありさまにぞ(美しく在られたので)、何ごとにも目移るまじかりける(どうしても見劣りしてしまった)。例の(いつものように)、篳篥(ひちりき、縦笛)吹く随身(随行官)、笙の笛(さうのふえ、複筒笛)持たせたる(わざわざ持って来ていた)好き者などあり(風流な者も居た)。　*原文注釈に依ると、古代歌謡の催馬楽にある一曲「葛城(かづらぎ)」の一節、との事。内容は、ヤマトカシハラ金剛山葛城の近く飛鳥アスカ豊浦トユラの水辺で「真珠が採れて目出度い」という祝い歌、との事。

僧都、琴(きん、七弦琴)をみづから持て参りて、

「これ(これで)、ただ(せめて)御手一つ(君に一曲でも)あそばして(御弾き頂いて)、同じうは(どうせなら)、山の鳥もおどろかしはべらむ(山の鳥＝寺の者たちにも管絃の素晴らしさを知らしめて驚かせて遣って下さい)」

と切に聞こえたまへば(と源氏に切望なされたので)、

「乱り心地(病み上がりで)、いと(とても)堪へがたきものを(思うようには出来ませんが)」と聞こえたまへど(と御答え為されたが)、けに(それでも)憎からず(そつ無く)かき鳴らして(演奏し為されてお開きとして)、皆立ちたまひぬ(一同帰途に着かれた)。

飽かず口惜しと（束の間の典雅な宴だったと）、言ふかひなき（残念がって）法師（寺僧たちや）、童べも（小僧なども）、涙を落としあへり（涙を流し合った）。まして、内には（更に奥の間では）、年老いたる尼君たちなど、まださらに（いまだかつて）かかる人の御ありさまを（こうした最上貴族の祝宴を）見ざりつれば（見た事が無かったので）、「この世のものともおぼえたまはず」と聞こえあへり（言い合っていた）。僧都も、

「あはれ（御労しい）、何の契りにて（何の因果で）、かかる御さまながら（あの美しい御姿だと言うのに）、いと（ひどく）むつかしき（煩わしい）日本（ひのもとの、この国）の末の世に（の此の末世に）生まれたまへらむと見るに（お生まれに成られたのかと思えば）、いとなむ悲しき（何とも嘆かわしい）」とて、目押し拭ひ給ふ（めおしのごひたまふ、涙を拭い為される）。

この若君（ところで兵部卿宮の姫たる若君だが）、幼な心地に（子供心ながらも源氏を）、「めでたき人かな（素晴らしい人）」と見たまひて（とお思いになって）、

「*宮の御ありさまよりも（お父さまのお姿よりも）、まさりたまへるかな（御立派でいらっしゃる）」などのたまふ（と仰る）。　*この若君にとって「宮」と呼ぶべき帝に連なる親王や内親王にあたる近親者とは、兵部卿宮たる父君だけである。

「さらば、かの人の御子になりておはしませよ（では、あの方のお子にお成り為されませ）」

と聞こゆれば（と女房が申せば）、うちうなづきて（素直に肯いて）、「いとようありなむ（そうしたい）」と思したり（とお思いに為る）。雛遊び（ひひなあそび、人形遊び）にも（をする時も）、絵描いたまふにも（ゑをお描きに為る時も）、「源氏の君」と作り出でて（と題を立てて）、きよらなる衣着せ（きれいな衣裳を着せてみたり）、かしづきたまふ（御仕えごっこをし為される）。

［第六段　内裏と左大臣邸に参る］

君は（帰京した源氏は）、まづ内裏に参りたまひて、日ごろの御物語など（北山での祈祷と病状などを）聞こえたまふ（上に御報告なされる）。「いといたう衰へにけり（本当に随分痩せてしまった）」とて（と帝は源氏を見て）、ゆゆしと思し召したり（御心配にお思い為される）。聖の尊かりけることなど（また、聖の修法の霊験などを源氏に）、問はせたまふ（お尋ね為される）。詳しく奏したまへば（源氏が詳しく御報告為されれば、帝は）、

「阿闍梨などにもなるべき者にこそあなれ（尊師とも言うべき高僧のようだ）。行ひの労は積もりて（修行に明け暮れ為されて）、朝廷に（おほやけに、世に広くは）しろしめされざりけること（知られて御出でには成らなかったのか）」と、尊がりのたまはせけり（敬意を持って仰せに為った）。

大殿（おほいどの、左大臣も）、参りあひたまひて（御所に来合わせて居られて）、

「御迎へにもと（私も御迎えに上がろうかと）思ひたまへつれど（思い致しましたが）、忍びたる御歩きに（忍びの御出掛けに大袈裟な御迎えも）、いかがと思ひ憚りてなむ。のどやかに（ゆっくりと）一、二日（いちににち）うち（まずは）休みたまへ（お休みなされませ）」とて（ということで）、

「やがて(それでは早速)、御送り仕うまつらむ(当家へ御送り致しましょう)」と申したまへば(と申されたので)、さしも思さねど(源氏は其の気も無かったが)、引かされてまかでたまふ(大殿に連れられて御所を退出なされた)。

我が御車に乗せたてまつりたまうて(大殿は源氏を御自分の車の主座に御乗せして)、自らは引き入りてたてまつれり(自身は次座に御着きに成った)。もてかしづききこえたまへる(大臣が源氏を大事に持て成される)御心ばへのあはれなるをぞ(お気遣いの周到ぶりに源氏は)、さすがに心苦しく思しける(さすがに無沙汰を気が引けてお思いになった)。

殿にも(左大臣邸でも)、おはしますらむと(源氏が御出でに成るだろうと)心づかひしたまひて(気を使って)、久しう見たまはぬほど(暫く出向かない内に)、いとど(ますます)玉の台(たまのうてな、貴人の御座)に磨きしつらひ(として磨き上げて)、よろづをととのへたまへり(準備万端整えていた)。

女君、例の(例によって)、はひ隠れて(引きこもって)、とみにも(直ぐには)出でたまはぬを(出ておいでに成らないのを)、大臣(おとど、父上が)、切に聞こえたまひて(頻りに言い聞かせて)、からうして渡りたまへり(やっと源氏の前に現れ成された)。ただ(しかし、まるで)絵に描きたるものの姫君のやうに、し据ゑられて(じっと置き座らされて)、うちみじろき(身じろぎ一つ)たまふこともかたく(為され難く)、うるはしうてものしたまへば(整然さを保たれていたので)、思ふこともうちかすめ(心の内を少しほのめかしたり)、山道の物語をも聞こえむ(北山行の様子などを話しても)、言ふかひありて(話の仕甲斐があって)、をかしういらへ(興味持った答えが)たまはばこそ(あればこそ)、あはれならめ(情も通うが)、世には心も解けず(何の話にも打ち解けず)、うとく(よそよそしく)恥づかしきものに(気詰まりな相手と源氏を)思して(お思いに為って)、年のかさなるに添へて(年月を重ねるほど)、御心の隔てもまさるを(ますます心を閉ざされるのを)、いと苦しく(源氏はとても不満で)、思はずに(心外だったので)、

「時々は、世の常なる御気色を見ばや(普通に打ち解けた様子を見たいものです)。堪へがたうわづらひはべりしをも(とても辛い病状のときも)、いかがとだに(大丈夫ですかとさえ)、問ひたまはぬこそ(お尋ねも為されないとは)、めづらしからぬことなれど(今更ながら)、なほうらめしう(やはり冷たいと)」

と聞こえたまふ(申しなさる)。からうして(すると女君はやっと答えて)、

「*問はぬは、つらきものにやあらむ(尋ね無いと貴方でも辛いと御思いに為るものなのでしょうか、貴方の方は平気で私を御尋ねに為らないままですが)」　*女君は、「問はぬ」を「見舞わない」と「訪れない」に掛けて、源氏の言い草に答えながら、其の無沙汰を窘めている。

と(と言って)、後目(しりめ、流し目)に見おこせたまへるまみ(を向けた女君の目元は)、いと恥づかしげに、気高ううつくしげなる御容貌なり。

「まれまれは(たまのお言葉かと思えば)、あさましの御ことや(情けない言い方ですね)。訪はぬ(とはぬ)、など言ふ際(きは、間柄)は、異(こと、私たちのような正式の夫婦とは別の間柄)

にこそ(に於いて)はべるなれ(使う言葉です)。心憂くも(気落ちする)のたまひ(仰り方を)なすかな(為さるのですね)。世とともに(日を経るほど)はしたなき御もてなしを(邪険な素振りを為さるのを)、もし、思し直る折もやと、とざまかうざまに(あれこれと)試みきこゆるほど(持ち掛けてみましても)、いとど(ますます)思し疎むなめりかし(疎遠に御思いに為っていらっしゃるようですね)。よしや(まぁいいでしょう)、*命だに(其の内に分かるでしょうから)」　*原文注釈に依ると、≪『奥入(おくいり、鎌倉時代の藤原定家著なる源氏物語注釈書)』は「命だに心にかなふものならば何か別れの悲しからまし」(古今集　離別　三八七　しろめ)を指摘する。≫、とある。「生きているうちに願いが適うなら今の別れも悲しくは無い」と言う切ない歌だが、そう思って自らを慰めた、という事らしい。

とて(と言って源氏は)、夜の御座(おまし、御寝所)に入りたまひぬ。女君、ふとも(さっぱり)入りたまはず(お入りに成る様子が無い)、聞こえわづらひたまひて(源氏も誘いあぐねて)、うち嘆きて臥したまへるも(嘆息して横になりながら)、なま心づき(浮気心が)なきにやあらむ(無いでも無いので)、ねぶたげにもてなして(眠そうな振りで女君を放って置いて)、とかう世を思し乱るること多かり(他の恋心に思いを馳せていた)。

この若草の(あの北山の少女の)生ひ出でむほどの(成長振りが)なほゆかしきを(やはり気に掛かって)、「似げないほどと(尼君が幼君を似合わないほど幼いと)思へりしも、道理ぞかし(ことわりぞかし、思うのも無理は無い)。言ひ寄りがたきことにもあるかな(申し込みにくいところでは在るな)。いかにかまへて(どうにかして)、ただ心やすく(まずは単に養育の世話として気軽に)迎へ取りて、明け暮れの慰めに見む(毎日藤壺宮を偲ぶ慰めとして側に見ていたい)。兵部卿宮は、いとあてになまめいたまへれど(とても上品で優雅でいらっしゃるが)、匂ひやかになどもあらぬを(香り立つ美しさをお持ちというわけではないのに)、いかで(どうして幼君は)、かの一族(ひとぞう、家系の叔母なる藤壺宮)におぼえたまふらむ(似ておいでなのだろう)。ひとつ后腹(きさいばら、先帝の同腹の御子)なればにや(だからなのだろうか)」など思す(などと御思いに為る)。ゆかりいとむつましきに(幼君と藤壺宮の血縁がとても近いので)、いかでかと(どうにかして幼君を側に置きたいと)、深うおぼゆ(深くお考えに為る)。

[第七段　北山へ手紙を贈る]

またの日(源氏は翌日)、御文たてまつれたまへり(北山に御手紙を遣わされた)。僧都にもほのめかしたまふべし(僧都宛にもあらましをお伝えに為られた)。尼上(あまうえ)には、

「もて離れたりし御気色のつつましさに(取り合わない御様子に気後れして)、思ひたまふるさまをも(胸の内を)、えあらはし果てはべらずなりにしをなむ(お伝えし切れず仕舞いと為っております)。かばかり聞こゆるにても(このように申し上げて)、おしなべたらぬ(並々ならぬ)志のほどを(我の意向を)御覧じ知らば(お分かり頂ければ)、いかにうれしう(どんなに嬉しい事でしょうか)」

などあり(などと認めてあった)。中に、小さく引き結びて(別に小さく結んだ手紙が挟んで入れてあって、)、

「面影は身をも離れず山桜、心の限りとめて来しかど　(和歌 5-12)

「思い切れずに山桜、どう取りとめてか北山かど　(意訳 5-12)

*「面影は」は〈風景を〉と〈思う姿は〉。「みをも」は〈見をも＝目にも〉と〈身をも＝片時も〉。「離れず」は〈奪われる〉と〈忘れない〉。「山桜」は〈山の桜〉と〈山に居た人〉。「心の限りとめて」は〈印象深く留めて〉と〈思いの丈を残して〉。「来しかど」は〈きし門＝来ましたから〉と〈こしか、ど＝来た心算ですが〉。以上の語意分解を纏めると、一意は「目を奪われた見事な山桜の風情が豊かな思い出です」とあり、今一意は「貴女を片時も忘れずに居る思いは十分お伝えした筈ですが」とある。

夜の間の風も(よのまのかぜも、夜に吹く風に桜が散り去ってしまいはしないかと＝あなた少女が余所の男へ行ってしまわないかと)、うしろめたくなむ(気掛かりで為りません)」

とあり。御手などはさるものにて(字の美しさも其うだが)、ただはかなうおし包みたまへるさまも(ひっそりとした恋文の包み方にも)、さだすぎたる御目どもには(盛りを過ぎた老女の目には)、目もあやにこのましう見ゆ(微笑ましくも晴れがましくも思えた)。

「あな、かたはらいたや(あら、困りました)。いかが聞こえむ(どう御伝えしましょう)」と、思しわづらふ(と尼君は困惑なさる)。

「*ゆくての(あの平癒祈願の際の序ででの)御ことは、なほざりにも(座興かと)思ひたまへなされしを(お思い致して居りましたものを)、振り延へさせ(ふりはへさせ、わざわざ改めての御消息を為され)たまへるに(下されましても)、聞こえさせむかたなくなむ(何とも御返事致しかねる所で御座います)。まだ「*難波津(なにはづ)」をだに、はかばかしう続けはべらざめれば(すらすら書き続けられない幼子ですので)、かひなくなむ(とても御相手は、務まりません)。さても(これはもう)、　*尼君の此処の返事は謙遜した挨拶と言うより、本心かと思われる節がある。と言うのも源氏は帰京間際に、前夜の打ち明けに対する返事を催促した歌を尼君に呈したが(「見て知ってると言ったのに、まだ真に受けて貰えませんか(意訳 5-10)」)、其の時の尼君の返歌は突剣呑な遣り過ごしだった(「何だか良く分かりませんねえ、空まで霞んでおりますし(意訳 5-11)」)。源氏の歌を真に受けていたとしたら、相当に非礼な事かとも思えたが、座興と受け止めれば実に興に乗った軽妙な返歌だったようにも思える。病気平癒の祈願に来た序でに垣間見た女子供をからかう源氏の煩い座興に尼君は厭な顔一つ見せず上手に付き合った、という事だったのか。　*原文注釈に依ると、『紫明抄(しめいしょう、鎌倉時代の源氏物語の注釈書)』は「難波津に咲くやこの花冬ごもり今は春べと咲くやこの花」(古今集仮名序)を指摘。初心者の手習い歌である、とある。また、Web サイトの多くに依ると此の引歌は、仁徳天皇の即位を「咲くや此花」と讃える歌で、難波に宮処が開かれるまで三年間帝位が空白だったことを「ふゆごもり」と詠み込んである、ということらしい。ただ引歌自体の言葉遊びとしては、「難波津に、昨夜来の端(昨夜着いた時は)、振ゆ隠り(嵐を避けて入り江に逃げ込んだだけだったが)、今は(今朝改めて)、見る辺と(岸辺を見れば)、咲くや此花(梅盛りで船出を祝うようだ)」、といった所だろうか。

嵐吹く尾上(をのへ)の桜散らぬ間を、心とめけるほどのはかなさ　(和歌 5-13)

峰の桜の吹き晒し、何の憐れか吹き下ろし　(意訳 5-13)

*此の歌の面付きは「峰の桜は嵐が吹けば一気に散り去る潔い風情です」とあり、其の歌意も「幼子への興味は風の一吹きほどの気紛れかと存じます」と固辞または受け流して、事を納めたいと御答えしている。しかし敢えて「嵐吹く」

と歌い出した事に意味が無い筈は無い。「嵐吹く（度を過ぎた）尾上の（男の勝手で）桜散らぬ間を（幼子が傷付く前に）、心とめけるほどの（御遠慮頂く方が）はかなさ（無難です）」という嗜めだが、此れは暗意である。不敬にして決して源氏に対して口に出来る言葉ではない。しかし、詠われていない此の意が最も強烈に訴えて来る。

いとどうしろめたう（本当に不安ですので）」とあり。僧都の御返りも同じさまなれば、口惜しくて、二、三日ありて、惟光をぞたてまつれたまふ（惟光を召して北山に遣わそうと為さる）。

「少納言の乳母（せうなごんのめのと）と言ふ人あべし（という女房が居たはずだ）。尋ねて、詳しう語らへ（上手く言い含めよ）」などのたまひ知らす（などと指図なさる。惟光は）。「さも（いやはや）、かからぬ（見境も無く）隈なき（興味を持つ）御心かな（好き者ぶりだな）。さばかり（あのように）いはけなげなりし（幼そうにしていた）けはひを（ものまでを）」と、まほならねども（あまり良くは覚えていなかったが）、見しほどを思ひやるもをかし（少女を垣間見たときの事を改めて思い出してみるのも面白かった）。

わざと（今度はわざわざ側用人直々たる）、かう御文あるを（惟光朝臣なる御文遣いだったので）、僧都もかしこまり聞こえたまふ（僧都も正式の申し込みと受け止めて応対為される）。少納言に消息して会ひたり（惟光は僧都に許可を得て少納言の乳母に話を通し、其の取次ぎで尼君に面会した）。詳しく（惟光は尼君に詳しく）、思しのたまふさま（源氏の思い入れと）、おほかたの御ありさまなど語る（大体の経緯を説明した）。言葉多かる人にて（さらに惟光は多弁を労して）、つきづきしう（源氏の世話を受けて損は無いと説得を）言ひ続くれど（言い続けたが）、「いとわりなき御ほどを（何とも困ったお申し入れを）、いかに思すにか（どうしたものか）」と、ゆゆしうなむ（厄介な事として）、誰も誰も思しける（僧都も尼君も思い悩まれた）。

御文にも（源氏の手紙にも）、いとねむごろに書いたまひて（格別に親しみを込めて記されていて）、例の、中に（例の中に挟んだ結び文に）、「かの御放ち書きなむ（まだ書き取りさえ覚束ない拙さと言う幼君からの一字綴りのお返事を）、なほ見たまへまほしき（ぜひ見せて頂きたい）」とて（としてあって）、

「あさか山浅くも人を思はぬに、など山の井のかけ離るらむ」（和歌 5-14）

「一緒に上ろう浅香山、一緒に覗こう山の井戸」（意訳 5-14）

*この歌は原文注釈に依ると、「源氏の贈歌。『紫明抄』は「浅香山影さへ見ゆる山の井の浅き心を我が思はなくに」（古今集仮名序）を指摘。尼君の「難波津」に寄せて、和歌の手習い歌である「浅香山」の歌を踏まえた歌を贈った」、とある。源氏の本意としては、幼君に捧げたのだから、幼君にも分かるように詠んだと言うことだろう。この引歌の背景は諸説あるようなので歌意の特定は避けるが、字面では「浅か山の山影を映すほどの山の水溜りのような清い心の私が貴方を浅く思う筈はない」とあって、「浅し」と言う言葉が逆転するようなを遊び歌の趣と成っているようだ。ただ、「あさかやま」は「安積山」とも表記があり、「浅香」は当て字らしいが、当て字も洒落も思い違いも発想の転換にはなる。この「浅香山」の歌を踏まえた源氏の贈歌ということになると、「『浅香山』の歌にあるように私が深い気持ちと申し上げておりますのに、なぜ貴方は『山の井』の影を隠すように遠く離れて御出でなのでしょう」、となる。「かけはなる」が〈影離る〉と〈掛け離る〉との複意、との事。

御返し(尼君の代詠みになる御返歌は)、

「汲み初めてくやしと聞きし山の井の、浅きながらや影を見るべき」(和歌 5-15)

「山の井の影を所望と聞くだけで、移り気のほどが計れます」(意訳 5-15)

*この歌は原文注釈に依ると、「尼君の返歌。『異本紫明抄』は「悔しくぞ汲みそめてける浅ければ袖のみ濡るる山の井の水」(古今六帖二　山の井)を指摘」、とある。この引歌も背景は不明なので其の思いまでは計り知れないが、歌意は「一度きりとは薄情な、汲んでみて分かった『山の井』の底の浅さのように、身体は濡れないのに涙で袖ばかり濡らしています」と読める。これが恨み節か誘い水か戯れ歌かは判然としないが、遊び歌と言うには艶やか過ぎる。この「山の井」の歌を踏まえた尼君の返歌ということになると、「『山の井』の歌にあるように私が御相手してから泣きを見る薄情さで『山の井』の影を映すように貴方は会いたいと仰せなのでしょう」、となる。まるで年増の返歌で幼君の代読とは思えないが、紛れも無く幼君側の返歌である。

惟光も同じことを聞こゆ(惟光は御返辞された尼上の様子を此う源氏に報告申し上げた)。

「このわづらひたまふことよろしくは(尼上は此処暫く患って御出でなのを持ち直せば)、このころ過ぐして(もう少し様子を見ての事ですが)、京の殿(との、邸)に渡りたまひてなむ(お帰りに成ってから)、聞こえさすべき(幼君にお話しされるようです)」とあるを(と言うのを聞いて源氏は)、心もとなう思す(掴み所無く感じていらした)。